

Nara Women's University

古代日本語表記と歌木簡

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-11-17 キーワード (Ja): 仮名主体表記, 歌木簡, 上代特殊仮名遣い, 難波宮発掘調査 キーワード (En): 作成者: 毛利, 正守 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2492

奈良女子大学 21世紀 COE プログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
特別シンポジウム 平成十八年十一月十九日 於奈良女子大学記念館講堂

古代日本語表記と歌木簡

大阪市立大学大学院教授

毛利 正 守

- 一、難波宮跡発掘調査の概要
- 二、日本最古の萬葉仮名文の木簡
- 三、当該木簡と上代特殊仮名遣い
- 四、十一文字についての訓みと解釈

A、前期難波宮は、宮殿中心部の左右に八角形の楼閣建築がそびえ立つことや、政務や国家の重要な儀式などを行う場である朝堂院に14棟以上の建物が配置されるなど、他の宮殿にはみられない特徴をもっており、後に続く藤原宮や平城宮などの宮殿のスタートとなる国内最初の本格的な宮殿として注目される。

B、今回、調査を行った所は、前期難波宮の宮城内より南西約150mにあたる位置である。その場所は、従来の調査結果で、前期難波宮造営以前に谷であったことがわかっており、難波宮を造営するに際して、谷を埋め立てるために大規模な盛り土をして整地を行ったことが確認されている。その盛り土の下には、ウシやウマの骨が大量に見つかっており、難波宮造営時に何らかの儀礼が行われたことが推定される。また、盛り土の下からは百済の土器も出土している。

C、今回、地表面から約5.6m下まで調査が行われた。

第1層 大坂夏の陣後の厚い整地層

第2～4層 豊臣氏大坂城期の3期にわたる整地層

第5層 中世の作土層

第6層 前期難波宮造営時の整地層

第7層 それ以前の谷の埋土層

D、第6層は、0,5〜0,9 mの厚さで、難波宮造営時に埋め立て、整地された地層である。この層は谷の中心部にいくにしたがって厚くなっている。第7層以下は、造営に係る整地以前に谷を埋めている地層であって、この地層からは、難波宮以前の時期の土器などが多く見つかっており、今回の木簡は、こうした埋め土から出土したものである。

E、木簡の長さは、18,5 cm、幅は2,6〜2,65 cm、厚さは0,5〜0,65 cmである。木簡の出土した層位、及び難波宮跡周辺に位置する谷が整地された時期、木簡と同じ地層から出土した土器の時期などから、この木簡の年代は、前期難波宮が完成する六五二年前後より古い、7世紀中頃と考えられる。

(以上、A〜E、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会の資料より)

F、日本最古の萬葉仮名文の木簡

和歌の一部の可能性。 散文の可能性はあるか(春草の初め之なり。とし)。)

G、歌はいつの時代に如何なる書式で書きはじめられたか

人麻呂歌集

略体歌

妹いもがため為な 菅すがのみつみ実み採た 行ゆきしわれ吾われ 山やまぢにまどひ路ぢ或ある 此このひくらし日ひ暮暮る (巻7・一二五〇)

非略体

古いにしへの之の 賢さかしきひと人ひと之の 遊あそびけむ兼も 吉よしの野の川かはら原はら 雖みれ見どあか不ぬか飽か鴨も (巻9・一七二五)

H、平成十年十一月 四国徳島県観音寺遺跡 「奈尔波ツ尔作久矢己乃波奈」
六八〇年頃のものとの推定、天武朝のもの。

I、今回の木簡の発見は、萬葉仮名文を一挙に二十〜三十年遡らせることとなった。
日本語の表記や歌の書記史において、画期的な資料と言える。

J、木簡と歌集における歌の書記のあり方をめぐって

K、十一文字の訓みと解釈

イ、一文字目と六文字目の「皮」

ロ、「はるくさ」(春草)

①、大宮は ことと聞けども 大殿は ことと言へども 春草の 繁く生ひたる
、(巻1・二九、人麻呂)

①春草の 繁き我が恋 大き海の 辺に行く波の 千重に積もりぬ (巻10・一九二〇)

③、ひさかたの 天見るごとく まそ鏡 仰ぎてみれど 春草の いやめづらしき

我が大君かも (巻3・二三九、人麻呂)

ハ、七文字目と十一文字目の「斯」

リ、九文字目の「之」

イ、「名詞(始め) + 強意の助詞(し) + とし」

(他動詞(始む)の連用形(始め) + 過去の助動詞(き)の連体形(し) + とし)

「刀斯」の「刀」は甲類の仮名

甲類(ト)として「迅し」または「鋭し」の意

「春草の初めしとし」は、(春草のように)初めが・勢いがある・はげしいといったほどの意になろうか。

ロ、「之」を「の」と訓む可能性

「之」と訓む場合

萬葉仮名(音仮名・訓仮名)としての用い方ではなく、意味をもった、言わば訓字としての使用

仮名主体表記

「奈気伎之麻佐牟」(巻15・三五八一)、「由久左伎之良受」(巻20・四四三六)

(ナゲキ之マサム・ユクサキ之ラズのようにノと訓むことはない)

訓字主体表記

「神代之所念」(巻3・三〇四)

「賢木之枝尔」(巻3・三七九)、「年之経者」(巻12・三二〇七)

「大王之御命恐」(巻3・三六八)

「于智弓之夜奔務」(日本書紀、巻3、神武天皇条)

M、音仮名と訓仮名

イ、観音寺遺跡の木簡の萬葉仮名

「奈尔波・己乃波奈」など音仮名が用いられる中での、「矢」（訓仮名）

ロ、平城京木簡にみる難波津の歌の「己乃者奈」

漢文の助辞として用いられる「者」を「花」の「は」に当てる。

この「者」も、いわば訓仮名としての使用

ハ、『平城宮発掘調査出土木簡概報』十三

霧寒_ル □豊継

□久者_ル牟也

久利久者_ル牟

夜 久利久者_ル□

牟夜 「霧寒きに□豊継ぎ □くはやむ」「くりくはむや／くりくは□むや」

小谷博泰『木簡と宣命の国語学的研究』（和泉書院、昭61）

「□久者牟」、「久利久者牟」等の使用もそれである。

ニ、北大津遺跡出土の音義木簡（七世紀後半から八世紀初め）

贊_{田須}久_{阿佐ム}・加ム移母

采取 體_{ツク}□□

之_{久皮}

開

「田須久」

東野治之『書の古代史』（岩波書店、平6）

N、犬飼隆「古代の『言葉』から探る文字の道」

（『古代日本 文字の来た道』大修館書店、平成17）

イ、古い時代の漢字音をもとにしている

ロ、字体の簡略なものが多い

ハ、発音の清濁を書き分けない

ニ、漢字の訓を借りた表音的用法、すなわち「訓仮名」が、音を借りて発音をあらわす

「音仮名」と区別なく使われる。

O、音仮名の中に交える訓字のあり方

イ、二音節語の「家・妹・風・早」などの訓字

家_{いへ}尔_に阿_{あり}利_て豆_{いへ} 波_は 何_は刀_が利_と美_り姿_み 奈_な具_ぐ佐_さ牟_き流_む 許_こ 吕_こ波_ろ阿_は良_あ麻_ら志_ま 斯_し奈_な婆_は斯_し農_ぬ等_と母_も

(卷5・八八九)

我和由惠仁 妹奈気久良之 風早能 宇良能於伎敝尔 奇里多奈妣家利 (卷15・三六一五)

六一五)

口、一音節語の「樹・手・目・田・見」などの訓字

許等 波奴 樹尔波安里等母 宇流波之吉 伎美我手奈礼能 許等尔之安流倍志

(卷5・八一一)

於毛布惠尔 安布毛能奈良婆 之末思久毛 伊母我目可礼弓 安礼乎良米也母 (卷15・三七三一)

15・三七三一)

宇惠之田毛 麻吉之波多气毛 安佐其登尔 之保尾可礼由苦 曾乎見礼婆

許己吕乎伊多美 (卷18・四一二二)

和我世故之 气太之麻可良婆 思漏多倍乃 蘇 乎布良左祢 見都追志努波牟 (卷15・三七二五)

15・三七二五)

ハ、一音節語は、萬葉集では名詞または動詞等であつて、助詞には及んでいない。

① 紀州本や西本願寺本、温故堂本等で「乎可之佐伎 伊多牟流其等尔」(卷20・四四〇

八)と萬葉仮名の中にあつて、訓字「之」と記すけれども、次点本として信頼のお

ける元暦校本・類聚古集には、「乎可乃佐伎云々」と萬葉仮名「乃」で記す。

② 同じく紀州本や西本願寺本等で「四具礼之」(卷13・三三二四)と「之」と記すが、

元暦校本・天智本・類聚古集に、「四具礼乃」と「乃」で記す。

①②とも「乃」(萬葉仮名)を採用すべきである。

③ 「比等之可奈思母」(卷15・三六九三)を寛永版本がヒトノカナシモと訓み、「伊多

家苦之」(卷17・三九六二)を西本願寺本・細井本・紀州本等がイタケクノと訓んで

いるが、どちらの「之」も強意の助詞として「之」(萬葉仮名。ヒトシカナシモ・イ

タケクシ)に訓むべきである。

ニ、「之」の前か後かどちらかが萬葉仮名で、もう一方が訓字という場合

「三毛侶之 其山奈美尔」(卷7・一〇九三)、「意吉麻呂之 家在物者」(卷16・

三八二六) (以上の萬葉仮名は固有名である)、「神楽浪之 志賀左射礼浪」(卷2

・二〇六)、「鸞之 宇都之真子可母」(卷19・四一六六)、「荣流今日之 安夜尔

貴左」(卷19・四二五四)

ホ、一音節語の訓字に続く訓字の助詞

比等能宇 流 田者宇惠麻左受 伊麻佐良尔 久尔和可礼之弓 安礼波伊可尔勢武

(卷15・三七四六)

美夜故敵^{みやこへに} 多都日知可豆^{たつひちかづく} 安久麻豆^{あくまでに} 安比見而由可奈^{あひみてゆかな} 故布流比於保家^{こふるひおほけ} 牟^む (卷
17・三九九九)

伊射里火之^{いざりひの} (卷19・四二一八)

P、当該木簡の上代特殊仮名遣い

イ、この木簡で上代特殊仮名遣いに関わるのは、「乃・米・刀」。

「春草の」の「の」は乙類であり、「乃」の萬葉仮名も乙類であるので、適っている。同じく「始め」(初め)の「め」も乙類、「米」の仮名も乙類なので適っている。

ロ、「はじめのとし」を、「初めの年」の意に取るならば、「年」の「と」は乙類の仮名である。ところが「刀」は甲類の仮名であるので、仮名違いとなる。

Q、上代文献にみる上代特殊仮名遣いの乱れ

「取る」

水灌^{みなそそ}く 臣^{おみ}の嬢^{をじめ}子 秀罇^{ほだり}登良^{とら}すも 秀罇^{ほだり}斗理^{とら} 堅^{かた}く斗良^{とら}せ 確^{した}堅^{がた}く 弥^や堅^{がた}く斗良^{とら}せ
秀罇^{ほだり}斗良^{とら}す子 (古事記、下卷)

「問ふ」

記紀歌謡ではいずれも「斗^ト比^ヒし君はも」(古事記、中卷)、「我れを斗^ト波^ハすな」(日本書紀、卷11)と甲類(斗)であるが、萬葉集では「また言^{こと}刀^と波^はむ」(卷20・四三九二)の甲類(刀)と「人の等^と布^ふまで」(卷18・四〇七五)の乙類(等)が相半ばする。

R、当該木簡以外の木簡にみる上代特殊仮名遣いの乱れ

イ、『薬師寺木簡』

(表) 此香止^{このかど}羅^ら无人^{むじん}

(裏) 靈龜^{このたま}二年四〇

(此の香止^{このかど}羅^ら无人^{むじん} (『薬師寺木簡』)

ロ、『平城宮木簡』(一)、一七四号

田^の之^の比^ひ等^ら々^ら流^{りゅう}刀^{とう}毛^{もう}意^い夜^や志^し己^こ々^々呂^{りよ}曾^{そう}

「た^た之^の人^{ひと}ととる^{ととる}刀^{とう}毛^{もう}同^{おな}じ心^{こころ}そ」

助詞のトモのトは乙類。「刀」は甲類なので、仮名違い。

言問^{ことと}はぬ 木にはあり等^ら母^ぼ うるはしき 君が手^て馴^なれの 琴にしあるべし (卷5・八

行くへなく あり渡る登毛 ほととぎす 鳴きし渡らば かくやしのはむ (巻18・四〇九〇)

八、『平城京木簡』(一)、七九号

「津玖余々美字我礼□□□□□□」

「月夜好みうかれ」(阪倉篤義「国語資料としての木簡」『国語学』76、東野治之

『日本古代木簡の研究』塙書房、昭58)

「月夜」の「夜」は甲類。「余」は乙類なので、仮名違い。

ほととぎす こよ鳴き渡れ 燈火を 都久欲になそへ その影も見む (巻18・四〇

五四)

うちなびく 春を近みか ぬばたまの 今夜の都久欲 霞みたるらむ (巻20・四四

八九)

S、「年の初め」と「初めの年」

新しき 年乃波自米尔 豊の稔 するすとならし 雪の降れるは (巻17・三九二五)

新しき 年之初者 いや年に 雪踏み平し 常かくにもが (巻19・四二二九)

降る雪を 腰になづみて 参り出来し 験もあるか 年之初尔 (巻19・四二三〇)

新しき 年始尔 思ふどち いや群れて居れば 嬉しくもあるか (巻19・四二八四)

新しき 年乃始乃 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事 (巻20・四五二六)

丙子に、三韓の諸人に詔して曰はく、「先の日に、十年の調・税を復したまふこと既に訖りぬ。且加以、帰化ける初年に、俱に来る子孫は並に課役悉に免す」とのたまふ。(日本書紀、卷二十九、天武天皇十年八月条)

○訓と解釈の可能性

一、「春草の初め之」とし

二、「春草の初めしとし」 (春草のように) 初めが勢いがある・はげしい

春草の初めは勢いがある・はげしい

三、「春草の初めのとし」

(春草のように) 初めの稔り

(春草のように) 初めの年・初年・元年

音韻

上代特殊仮名遣表

	甲類	乙類
キ	支岐伎妓吉棄奔枳企耆祇祇・寸杵服來 藝岐伎儀熾祇嗜	歸己紀記忌幾機基奇綺騎寄氣既貴癸・木城樹 疑擬義宜
ヒ	比毘卑辟避譬臂必賓嬪・日氷檜負飯 毘毗妣弭寐鼻彌婢	非悲斐肥彼被飛祕・火乾簸樋 備眉媚靡・傍
ミ	美彌彌弭寐湄民・三麥御見視眷水	微未味尾・箕實身
ケ	邪計稽家奚鷄雞谿谿啓價賈結・異 牙雅下夏覓	氣開既概慨該該階戒凱愷居舉希・毛食飼消箭 宜義噐尋碍
ヘ	幣弊敝蔽平鞞霸陛反返遍・部分隔重邊畔家 辨孽謎便別	閉閉倍陪杯珮俳沛・綜盆缶甕廳頡經戸 倍每 礙傷・削
メ	賣咩謎綿面馬・女	每梅璫妹味晚・目眼海藻
コ	古故胡姑枯枯固高庫顧孤・子兒小粉籠 胡吳誤虞五吾悟	許己巨渠去居舉虛據莒興・木 甚其期語馭御
ソ	蘇蘓宗素沂祖巷嗽・十麻磯追馬 俗 後	曾層贈增憎僧則賊所諸・其衣襲絜絜彼苑 叙存鐫鋤序茹
ト	①②土杜度渡妬覩徒塗都圖屠・外砥礪戸聰利速門 度渡	③④鄧騰騰臺苔澄得・迹跡烏十與常飛 杼滕騰藤迺耐特
ノ	怒努弩	能⑤迺・笑篋
モ	毛	母
ヨ	用庸遙容⑥・夜	余與豫餘譽預己・四世代吉
口	漏路露婁樓魯盧	呂侶閭盧慮稜勒里
工	愛哀埃衣依・榎可 _ア 愛荏荏得 行	延曳眷遙要緣裔・兄柄枝吉江 行

(註) ・印以下訓假名 ゴチックは濁音

(万葉学会編)

NW06-2

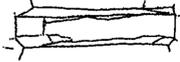
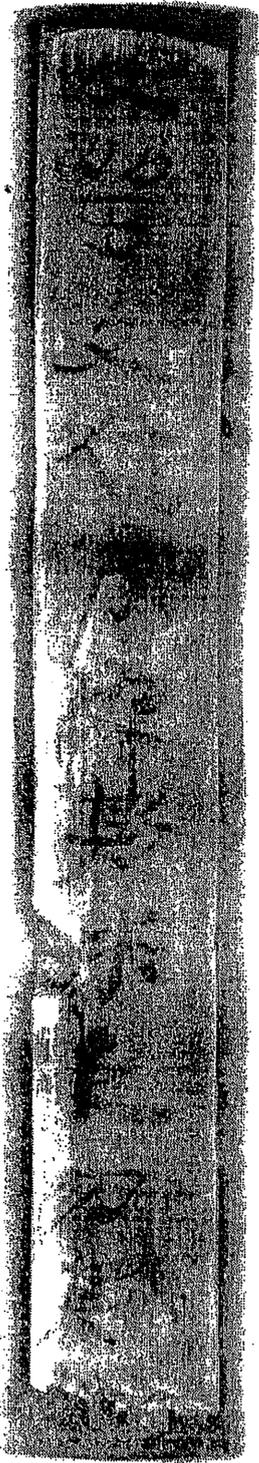
R-148

2006.9.19

Ⅱ区 8F,

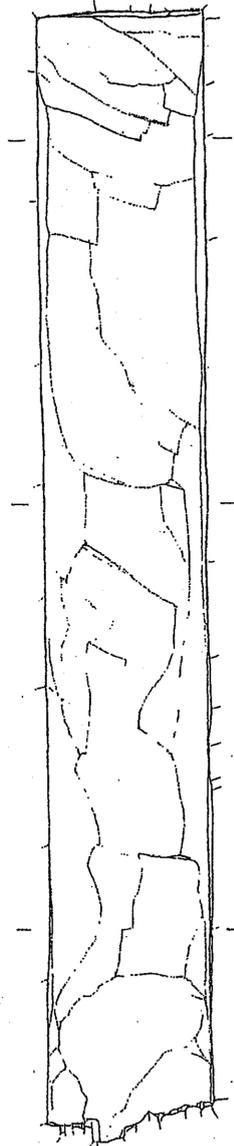
発掘 松本百合

2006.9.23



表

裏



現存長 18.5
幅 2.6~2.65
厚 0.5~0.65



木目が「水平」に近いので、
材料の木は「かなり太い」
文字は「兵輪」の内側に書く